

〈自覚〉する身体——西田のメヌ・ド・ビラン評価から見えてくるもの

杉村靖彦（京都大学）

「西田哲学とフランス哲学」の関係が話題になるときに必ずもち出されるのが、「フランス哲学についての感想」と題された 1936 年の小論である。そこでは「フランス哲学独特な内感的哲学」への西田の強い共感が示されている。実際、西田のフランス哲学への言及を少し系統立てて辿ってみれば、それが単なる好事家的な関心によるものではなく、フランス哲学独特の思考態度が、西田哲学の根本概念である「自覚」と深く通じあうものとして受けとめられていることが見えてくる。

西田がこの「サンチマンの哲学」の原点に位置づけているのがメヌ・ド・ビランである。まさしくデカルトの「我思う」の手前に遡行し、それを「我行為す、我意志す」の「内奥感(sens intime)」として受けとり直したのがビランであった。そこには、西田がデカルトのコギトを自らのいう「自覚」へと変容させる際に踏む道筋と大きく重なるものがある。西田もまた、コギトを「働く自己」の、まさにそれが働いている現場で掴まれる「直接知」にまで掘り下げてとらえ直すべく苦闘を重ねたのであった。二人の哲学者が共に自らの思索を「坑夫(mineur)」の仕事と称しているのは、単なる偶然の一致ではあるまい。

実際、フランス哲学におけるビランの意義は、フランス・スピリチュアリズムの源流というような教科書的な説明によって尽くされるものではない。「サン〔ス〕(sens)」において、外的刺激への反応としての「サンサシオン(sensation)」には還元できない「サンチマン(sentiment)」というあり方を際立たせ、この意味での「感じる自己」を拠点として初めて見えてくるリアリティを軸に哲学を編成し直すこと。そこにこそ、ビラニズムが後のフランス哲学へと遺贈したポテンシャルがある。レヴィナス、ミシェル・アンリ、ディディエ・フランクなどによる 20 世紀後半のフランス現象学の展開は、このポテンシャルの独創的な活用の例といえよう。

この「感じる自己」が「身体的自己」であり、そこで身体の問題が決定的な地位を占めることはいままでもない。この問題との関係でも、今列挙したフランス哲学者たちと西田哲学との突き合わせは興味深い課題である。実際、西田においても、後期に向けて「自覚」の身体性が際立たせられていくことになる。注目したいのは、まさにその行程の端緒において、ビランへの立ち入った言及が繰り返し登場することである。新たな方向への漠たる予感を頼りに坑道を掘り進める西田は、あたかも頼れる同志に呼びかけるかのように、ビランの名を幾度も唱え、その特徴的な思索を引き合いに出すのである。

しかし、そこでのビランへの評価には、深い共感と同時に最終的な地点での留保が含まれている。西田とビランは、どのように重なりあい、どこで袂を分かっていくのか。今回の発表では、この点を考察することによって、西田とビランのみならず、西田哲学と現代のフランス哲学との可能的な関わりをも探してみたい。